

『国際文化学部・国際文化学研究科ファクトブックⅡ』

(沿革・構成編)

1. 沿革・設置目的	・・・ P 1	9. ミッション(教育研究上の目的・設置の趣旨目的)	・・・ P 5
2. 研究科長・学部長	・・・ P 3	10. ディプロマ・ポリシー	・・・ P 5
3. 副研究科長	・・・ P 3	11. アドミッション・ポリシー	・・・ P 6
4. 構成	・・・ P 3	12. カリキュラム・ポリシー	・・・ P 7
5. 取得可能な学位	・・・ P 4	13. 教育上の取り組み	・・・ P 8
6. 専任教員数	・・・ P 4	14. 学生に関すること	・・・ P 8
7. 予算規模	・・・ P 4	15. 就職	・・・ P 8
8. 校地・校舎等の状況	・・・ P 4	16. 教育研究の活動状況等	・・・ P 9

1. 沿革・設置目的

◆大正 12 (1923) 年

官立姫路高等学校設立

《設置目的》

男子の高等普通教育を完成し、特に国民道德の充実に努める。高度な教養を身に付けた「紳士」、高い識見を備えた指導的人物を育成する。

◆昭和 24 (1949) 年

神戸教養課程設置（昭和 25 (1950) 年御影分校に改称）

《設置目的》

新制国立大学設置に当たり、一般的教養の充実を図る。

神戸教養課程と姫路分校で一般教養課程を行うこととした。

神戸教養課程（御影分校）の教官構成は、文理学部文科所属 20 名，文理学部理科所属 4 名，法学部・工学部・教育学部所属各 1 名であった。

◆昭和 24 (1949) 年

姫路分校設置

《設置目的》

新制国立大学設置に当たり、一般的教養の充実を図る。

神戸教養課程と姫路分校で一般教養課程を行うこととした。

姫路分校の教官構成は、文理学部文化所属 15 名，文理学部理科所属 9 名，教育学部所属 1 名であった。

◆昭和 38 (1963) 年

教養部学内措置

《設置目的》

教養課程が神戸と姫路に二分された状況が長期にわたっていたが、昭和 32 (1957) 年頃に両分校の統合問題が具体的に提起され、昭和 35 (1960) 年に教養部設置が評議会で決議された。両分校の統合・移転地が決定した後、学内措置された。

◆昭和 39 (1964) 年

教養部設置

《設置目的》

昭和 38 (1963) 年に教養部の官制化が実施されることとなり、神戸大学では、昭和 39 (1964) 年に省令施設として正式に発足した。

◆平成 4 (1992) 年

国際文化学部設置

《設置目的》

従来の固定化された学問分野を統合し、国際化を迎えた我が国の社会的な要請に応じて新しい学際的な領野を開拓することを目的として、「異文化理解を深め、国際社会の協調を推進するためのコミュニケーションの方法を開発すること」を理念とし、異文化理解能力の養成、外国語運用能力の向上及び情報処理能力の開発を目標に教育研究を行う。

◆平成9（1997）年

大学院教育学研究科（修士課程）を改組し、
総合人間科学研究科（修士課程）設置

《設置目的》

本研究科は、国際文化学部と発達科学部2学部を基礎として、人間・文化・環境の相互関係を総合的に捉えることにより、国際的な異文化理解とコミュニケーションの理論と方法、世界の文化の形成と発展、人間の生涯にわたる発達の可能性と創造的な表現活動、人間と環境との調和・共生的関係の創出について理論的かつ実践的な教育・研究を行い、個別専門分野の枠を超えた人間科学研究の総合化を目指した。

◆平成11（1999）年

大学院総合人間科学研究科（博士課程）設置

《設置目的》

本研究科は、人類とそれを取りまく広義の環境及びそれを相互に結ぶ各種の文明・文化にかかわる現代的な諸現象を解析し、高度情報化、国際化、高齢化社会で生起する諸問題の解決への知見を得るとともに、人間に関わる応用的、臨床的諸問題を解決し得る研究者と高度な実践的専門家を養成することを目的とした。

本研究科は、現代社会で生起する人間の生存に関わるアクチュアルな問題の解明と実践的解決能力を有する人材養成を目指した。

◆平成16（2004）年

国立大学法人神戸大学発足

◆平成17（2005）年

国際文化学部改組

《設置目的》

グローバル化の進展とともに、世界システムやグローバルな文化のもつ普遍的で現代的な意義などを考える視点が求められるようになってきたと同時に、グローバル化の動きに対してローカルからの反発が世界各地で生起し、個別文化のもつ多様な価値観を捉える必要性も生じてきたため、「情報コミュニケーション能力の開発」、「現代文化の多角的分析」、「異文化理解の深化」、「個別地域文化研究の推進」、これらの教育研究のツールとなる「外国語運用能力向上」を目標とし、教育研究を行う。

◆平成19（2007）年

大学院総合人間科学研究科を改組し、大学院国際文化学研究科を設置

《設置目的》

グローバル化の進展、これに対抗するローカリゼーション、文化の再創造に向かうグローカリゼーション等、社会文化の今日的状況の大きな変化を踏まえ、この変化に積極的に対応するため。

2. 研究科長・学部長 (H26. 1. 1 現在)

◆大月 一 弘 (専門: 情報科学)

任期: 1 期目 (H25(2013). 10. 1 ~ H27(2015). 9. 30)



3. 副研究科長 (H26. 1. 1 現在)

◆櫻井 徹 (専門: 法哲学)

任期: 1 期目 (H24(2012). 4. 1 ~ H26(2014). 3. 31)

◆野谷 啓二 (専門: 英文学)

任期: 1 期目 (H24(2012). 4. 1 ~ H26(2014). 3. 31)

4. 構成 (H25. 5. 1 現在)

◆国際文化学部

学科名	入学定員	備考
国際文化学科	140	
合計	140	

◆国際文化学研究科

専攻名	入学定員		備考
	(M)	(D)	
文化関連専攻	20	6	
グローバル文化専攻	30	9	
合計	50	15	

◆部局内センター

○ 異文化研究交流センター

平成 18 (2006) 年 4 月 1 日設置

- ・目的 研究科における異文化研究をさらに発展させるとともに、その成果を活かして地域連携と国際交流を促進することを目的とする。
- ・業務 (1) 異文化研究に関すること。
(2) 地域連携に関すること。
(3) 国際交流に関すること。
(4) その他センターの目的達成に関すること。

○ メディア文化研究センター

平成 20 (2008) 年 4 月 1 日設置

- ・目的 研究科におけるグローバルな文化及びコミュニケーションに関する研究をさらに発展させることを目的とする。
- ・業務 (1) グローバルな文化及びコミュニケーションに関する研究。
(2) その他センターの目的達成に関すること。

5. 取得可能な学位

◆国際文化学部

学士（国際文化）

◆国際文化学研究科

博士課程前期課程：修士（学術）

博士課程後期課程：博士（学術）

6. 専任教員数

(H25(2013). 5. 1)現在

→国際文化学部・国際文化学研究科ファクトブックⅢ
(データ・資料編)のとおり

7. 予算規模

平成 24(2012)年度

運営費交付金等 967 百万円

外部資金 91 百万円

総計 1,058 百万円

※1 各部局における予算執行額を予算規模としている（ただし、設備整備費補助金・施設整備費補助金及び目的積立金は除く）。

※2 百万円未満を四捨五入して計上。（百万円未満は「0」、該当がないものは「-」で記載している。）

8. 校地・校舎等の状況

◆建物の延べ床面積

5,709 m²

◆教室等

・講義室 4室、 演習室 11室、 実験実習室 0室

情報処理学習施設 2室（補助職員 0人）、語学学習施設 0室（補助職員 0人）

◆専任教員研究室

70室

9. ミッション（教育研究上の目的、設置の趣旨目的）

◆国際文化学部

現代世界における異文化間の相互作用並びにグローバル化による文化の変容及びコミュニケーションにかかわる教育研究を行うとともに、幅広い知識を身に付け、深い異文化理解能力及び自在なコミュニケーション能力を持つ人材を養成することを目的としています。

◆国際文化学研究科

現代世界における異文化間の相互作用やグローバル化による文化の変容とコミュニケーションに関わる諸問題を学際的に究明することを教育研究上の目的としており、これらの問題に深い異文化理解能力及び自在なコミュニケーション能力をもって対応し得る、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を養成することを目的としています。

○文化関連専攻

異文化間の相互作用に関わる諸問題を文化の相対性を視座として究明することを教育研究上の目的とし、前期課程においては、個別地域文化と異文化間の相互作用について、幅広い専門的知識と基礎的な研究能力を持つ人材を養成することを目的とし、後期課程においては、個別地域文化と異文化間の相互作用について、高度な専門的知識と自立した研究能力を持つ人材を養成することを目的としています。

○グローバル文化専攻

グローバル化による文化の変容とグローバル化時代のコミュニケーションに関わる諸問題を究明することを教育研究上の目的とし、前期課程においては、現代の様々な文化を通底するシステムと外国語運用を含む先端的コミュニケーションについて、幅広い専門的知識や基礎的な研究能力を持つ人材を養成し、後期課程においては、現代の様々な文化を通底するシステムと外国語運用を含む先端的コミュニケーションについて、高度な専門的知識や自立した研究能力を持つ人材を養成することを目的としています。

10. ディプロマ・ポリシー

◆国際文化学部

国際文化学部は、開放的で国際性に富む環境の中で、「国境を越え、文化を横断し、活動する知性」を育成し、学問の発展、人類の幸福、地球環境の保全及び世界の平和に貢献することを目指している。

この目標達成に向け、国際文化学部では、教育課程を通じて授与する学位に関して、国際的に卓越した教育を保証するため、以下に示した2つの方針に従って学士の学位を授与する。

- ・国際文化学部原則として4年間在学し、卒業に必要な所定の単位を修得する。
- ・全学で定めた学位授与方針の4つの目標を踏まえて、本学部学生が学習を通して卒業までに達成

する目標は、次のとおりとする。

- 幅広い教養と高い倫理性を身につけ、豊かな感性と柔軟な思考力をもって、自ら判断し行動できる。
- 様々な文化や異なる社会に対する理解力をもち、異文化間の対話と問題解決を可能にする自在なコミュニケーション能力を発揮できる。
- 深い異文化理解と高度な情報コミュニケーション能力、さらには学際的知識を背景に、国際化時代の社会的要請に多角的に応えることができる。
- 文化の諸問題を世界的視野に立って考察し、地球規模で社会に貢献できる。

◆国際文化学研究科

国際文化学研究科は、高い異文化理解能力と自在なコミュニケーション能力を有し、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を育成することを目指している。

この人材育成目標、及び、全学で定めた学位授与に関する4つの目標を踏まえ、本研究科では、教育課程を通じて授与する学位に関して、以下に示した2つの方針に従って当該学位を授与する。

○博士課程前期課程

- ・本研究科に原則として2年間在学し、修了に必要な所定の単位を修得し、修士論文または修了研究レポートの審査に合格する。
- ・本研究科学生が、修了までに達成を目指す目標は次のとおりとする。
 - 文化を複合体として捉え、異文化間の関係性を多角的に探究することができる。
 - 言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し、現代のグローバル社会の諸課題に取り組むことができる。
 - 高い専門性の上に立った学際的研究を行うことができる。

○博士課程後期課程

- ・本研究科に原則として3年間在学し、修了に必要な所定の単位を修得し、博士論文の審査に合格する。
- ・本研究科学生が、修了までに達成を目指す目標は次のとおりとする。
 - 複合体としての文化の構造と動態を究明し、文化研究の先端的な領域を主体的に開拓することができる。
 - 言語情報コミュニケーションの諸問題を探究し、グローバル化する現代世界を多角的に研究することができる。
 - 高度な専門性の上に立った領域横断的な研究を行うことができる。

11. アドミッション・ポリシー

◆国際文化学部

国際文化学部では、「国境を越え、文化を横断し、活動する知性」をモットーとし、深い異文化理解と自在なコミュニケーション能力を生かして、グローバル化する世界の現状を把握し、国際化時代の社

会的要請に応えられる人材を育成することを教育目標として、次のような学生を求めています。

○国際文化学部の求める学生

1. 主体的に課題に取り組み、考え、判断し、行動する資質を持つ学生
2. 様々な文化や異なる社会を積極的に理解しようとする学生
3. 優れた日本語能力と外国語能力に加えて、論理的思考力を備えた学生
4. 現代文化の諸問題を学際的に考察するための基礎知識を持つ学生
5. 地球規模で社会に貢献しようとする意欲を持つ学生

◆国際文化学研究科

国際文化学研究科では、高い異文化理解能力と自在なコミュニケーション能力を有し、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を養成することを目指しています。

上記の教育研究上の目標をふまえ、本研究科が求めるのは次のような学生です。

○博士課程前期課程

- ・文化を複合体として捉え、異文化間の関係性を多角的に探究することに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生
- ・言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し、現代のグローバル社会の諸課題に取り組むことに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生
- ・高い専門性の上に立った学際的研究を行うことに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生

○博士課程後期課程

- ・複合体としての文化の構造と動態を究明し、文化研究の先端的な領域を主体的に開拓することに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生
- ・言語情報コミュニケーションの諸問題を探求し、グローバル化する現代世界を多角的に研究することに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生
- ・高度な専門性の上に立った領域横断的な研究を行うことに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生

13. 教育上の取組

- ◆ 多様な学習の機会 (英語授業, ボランティア活動, 海外留学等)
- ◆ ボランティア活動, 海外留学の教育的効果を高めるための、
単位認定以外の特別な取組 (例えば TOEIC 受験など)
- ◆ ダブルディグリープログラム受入れ・派遣学生数
- ◆ 協定に基づく海外留学者数
- ◆ 4月以外の入学者状況
- ◆ ナンバリング導入状況

→国際文化学部・国際文化学研究科
ファクトブックⅢ
(データ・資料編)のとおり

14. 学生に関すること

- ◆ 入学者数等 (H25. 5. 1 現在) (入学状況等調査のデータを引用)
- ◆ 留学生の出身地域内訳
- ◆ 日本人学生の海外派遣人数内訳

→国際文化学部・国際文化学研究科
ファクトブックⅢ
(データ・資料編)のとおり

15. 就職

- ◆ 就職率 (各年 5 月 1 日現在、5 年分、就職率=就職者/就職希望者)

	平成 20(2008) 年度	平成 21(2009) 年度	平成 H22(2010) 年度	平成 23(2011) 年度	平成 24(2012) 年度
学部	98.4%	97.6%	97.7%	96.1%	95.7%
博士前期課程	100.0%	70.6%	96.0%	83.3%	80.0%
博士後期課程	-	-	-	85.7%	22.2%

16. 教育研究上の活動状況等

16-1 科研費等

- ◆科学研究費補助金(補助金分・基金分)
- ◆共同研究, 受託研究, その他外部資金

16-2 研究業績の状況

- ◆主な業績数

→国際文化学部・国際文化学研究科
ファクトブックⅢ
(データ・資料編)のとおり

16-3 その他の教育研究上の活動状況等

- ◆海外において通算して1年以上教育研究に従事した日本人教員の在籍状況

17人

- ◆国外で学位を取得した日本人教員の在籍状況

Master/修士 6人 PhD./博士 7人

- ◆ベンチャーの実績

平成8(1996)年

(株)神戸インターネット

国際文化学研究科 大月教授

携帯電話向けに開発された、ホームページサーチエンジン『LOGONAVI』の運営、ネットワーク・データベース設計、構築、運用、セキュリティ管理及びコンサルティング